

平成十九年一月一日発行 第十七巻第一号 通巻第一八七号 毎月二頁一日発行
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

岡井省二創刊

平成19年1月号



初霞

高橋将夫

初
明
り
星
も
魘^す
だ
魅^ま
も
消
え
に
け
り

鏡
餅
搗
いた
数
だ
け
重
く
な
り

飾
ら
れ
て
そ
の
気
に
な
り
し
飾
海
老

宝
船
積
荷
降
ろ
さ
ず
ゆ
き
に
け
り

弁天の隣りに省二宝船
双六に黄泉への道のなかりけり
繭玉の数は消えたる夢の数
白象も犀も来てをる初詣
すなはち身成れる仏やお元日
密院のすみずみにまで初明り
初霞かかる宇宙の晴れ上り

雪 螢

大 島 翠 木

沈み行く日に曼珠沙華混み合へり
一風呂を浴び望月を浴びに出づ
月光とともに蔓草もみじせる
踏みば鳴く砂や虚空を渡る鷹
赤鳥居過ぎてはるかの灘を鷹
望郷の彩一握のピラカンサ
そのままの母の忌の空鳥渡る
石棺や実の真葛赤しあかし
照る紅葉かつ散る方は北枕
山々の紅葉の腹の中に泊つ

特別作品

墓の骨を生家跡のダムに掘く、五句

霧に撒く骨、や湖底も霧ならむ
冷まじや西方へ吐く湖の靄
母やはは山霧走る狐の尾
雪螢湖につながるいのちかな
生誕やひとつふたつの雪ぼたる
僧形と猫の尾消ゆる冬桜
晩秋の滝の快^け楽はなかるべし
抱き合ふ葉牡丹の日が山の端に
神の留守視線はづして折鶴へ
くさびらや一会を胸に省浄忌

槐安集

市場基巳

あやまりにゆく新米を手に提げて
写されてから夏瘦せと知りたるよ
青葛へ引かれてゆかなだらだら坂
鳴きつれて朝鈴いよよ酣に
産土や水辺の秋芽出揃ひし

水野恒彦

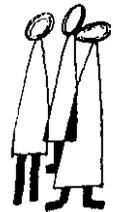
山に入り芒のふりをしてゐたり
えいごふの秋野の石として坐る
菊日和下駄の音など聞こえぬか
秋霖のどこまで入りて返すべく
花野へと封書一通出してをく

延広禎一

曼珠沙華群れて安心あんしん和讃かな
風呂敷をぼつと広げし豊の秋
補陀落へ雲に乗りたき貉かな
雪原を駈けをる善財童子かな
戯と大書の軸や炉を開く

加藤みき

冬はじめくきと棚田の形かな
水音も鳥ごゑもあり裏白も
絹雲の紅葉の谷の大こだま
ジエツト機と雲秋天の画伯なり
濡るるほど握つてゐたる龍の玉



石脇みはる

中島陽華

へだたりをおぼえてみたり零余子飯
灯ともりし願掛不動笑茸
斑鳩や十月の白曼陀羅華
菊を焚く翁媪の消えてをり
桐下駄のいつもの処石路の花

奥山の姥がへこ親天高し
ぬけぬけと赤坂見附方頭魚
小鳥来る鮪の鰓の欠いてあり
醉芙蓉小田原提灯干してあり
あな面白の生計にて万年青の実

竹内悦子

栗栖恵通子

笑面や十一月の曼陀羅華
霜月の黒竹の杖山の昼
蒲の絮高速道の道普請
榎櫃の実いつぱい落ちて幼稚園
天竺を目指す狐火ありにけり

そばがらの枕やせをり雁の声
月白のはじめの綾の鼓かな
耳底のボレロどこまで冬の雷
地獄図を展げて冬に入りけり
ナポレオンの罅反りにけり大白鳥

大島翠木

粧ひし山に向きたる蛇口かな
太陽の通つて行きぬ秋薔薇
鳩尾に言葉をしまふいぼむしり
月光の深夜を覚めて眠りけり
葉牡丹の落き渦まく力かな

雨村敏子

明野より熊野へ銀河澄みわたる
くさびらに夜いくたびか山の音
頤と眉はありけり省二ノ忌
水切つて十日の菊の息づかひ
茶袋を縫うてをりけり地虫鳴く

黒田咲子

衣々の雨に重たき秋大祭
雨に生抜かれし祭返り花
そぞろ寒北の窓より北を見て
誰が知るや高三郎に蝶も来ず
雀蛾を掃きだしてゐる月あかり

小形さとる

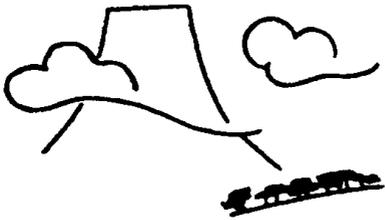
スリッパを揃へてゐたる良夜かな
ゼラチンの男のための秋日なる
眉間とは霧たち込める処なり
さねかずら観音堂に翁ある
鉄鉢の鏝の凹凸撫でて冬

本多俊子

西空に光走れり葉鶏頭
冷まじや釉ゆうの天目てのひらに
天地の涯を結びて花野かな
月光の中海蛇の泳ぐらむ
海星には海星のことば冬立てり

天野きく江

石ばかりそこの隙間の曼珠沙華
白猫のそゝそと入りたる真葛原
榎櫃の実ごつんごつんと海を見に
寧日やことに南京黄櫨紅葉
まみゆるや九竅きうけう抜けし紅葉風



槐市集

植木戴子

秋耕の土からからと音すなり
土付きの芋ごろごろと麻袋
宮水を汲んでをりけり神無月
新涼や棕櫚の箒を下したる
星月夜ハート型なる小石かな

植松美根子

更地はやえのころ草に覆われし
芋の葉や農夫の顔の見えかくれ
ふじばかま抱へ電車におくれけり
秋茄子の太るに足らぬ日ざしかな
話し声流れてきたり秋桜

宇田喜美栄

越し方や十日の菊を水切りす
夕影の蕘となりぬ秋深し
天翔る雪の白馬^く岳^はに立ち尽す
木道の上に落葉ふる岳樺
歓声のあがるや全山もみづりぬ

大山里

神主のふろしきづつみ木の実降る
好きなよに藁つと佇てり秋の天
きささげの実に空あけてゐる山家
夜神楽や巡査も立見してゐたる
持ち歩く蛇の衣なり秋日なり



槐集

高橋将夫選

やがて火となる刈芦のひとつかみ

岡崎

近藤 喜子

眠れずに羊呼び出す夜寒かな

バロツクのいつしかロココ秋の雲

日輪の臍へ広げし粉蕙

たましひの乾ききつたる種瓢

実紫命の声の静もりし

枚方

中野 京子

すずめ来て斉庭の砂の柿の色

かまつかのいよよ華やぐ白髪かな

満月へ逃げし兎とかぐや姫

昼月のはがれしごとく忘じをり

芦原に翳差しトロイメライかな

岡崎

岩月優美子

流木のオブジエに灘の秋入日

神々の氣息くさびら白かりし

天と地に響き合ひたる萩の声

潮騒の遙かに美男葛かな

巫の花野に飛ばす凶みくじ

東京

西村 純太

さなきだに黄泉路の葎虫時雨

蹠の透かす血脈露の玉

秋の虹母音の色と思ひをり

雲居より蠮螋の斧人吊りて

火の匂ひ風の匂ひや炬火祭

京都

竹中 一花

月光やしんと腓のからみをり

色のなき風に飛び交ふメールかな

狸々やねんねんころりと冬の海

葛橋渡りて鹿の鳴きし宿

住吉の燈籠高し新酒くむ

枚方

谷村 幸子

桐は実に墨のよごれのおちにけり

郁子の実のいまだ青くて雲龍図

大寺の羅漢さまざま椿の実

当尾なり無人の店の柿の色

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

やがて火となる刈芦のひとつかみ 近藤 喜子
刈芦をする人が、刈りとった蘆を焚いて濡れた身体を乾かしたり暖めたりする。蘆火である。刈芦を掴んだ一瞬、やがて火となる刈芦の行く末が脳裡をよぎる。ひと掴みの刈芦にも確かに定めがあり、行く末がある。そして、やがて火となると、へ蘆刈りの済みしところに蘆火かな 将夫」ということになる。

かまつかのいよよ華やぐ白髪かな 中野 京子
かまつかは葉鶏頭の古名。雁の来る頃に葉が赤く染まることから雁来紅ともいう。かまつかの赤と白髪対比が鮮やか。人はどうせ老いる。どうせ老いを詠むなら、意地でも華やかに詠みたいものだ。ちなみに、「かまつか」には葉鶏頭の他に露草、鎌柄(バラ科)、カマツカ(魚)があり、葉鶏頭と露草は季語。

芦原に翳差しトロイメライかな 岩月優美子
明るい芦原が少し翳った。静かなトロイメライの曲が流れてくるようだ。ちなみに、トロイメライは英語で、「夢」のこと。明るさと陰が交錯する。

秋の虹母音の色と思ひをり 西村 純太

虹に音を感じ、音に色を感じるのが掲句のユニークなところ。「秋の虹||母音の色」だという。子音に対して、母音はなめらかに喉を通過する。母音の響きそのものもやわらかさを感じさせるから、作者の音感と色感には納得させられるものがある。

月光やしんと腓のからみをり 竹中 一花
月光にからみあう腓。神々の世界に引き込まれそう。

郁子の実のいまだ青くて雲龍図 谷村 幸子
郁子は熟しても割れない。その辺が通草に似て通草と違うところ。その上、この郁子はまだ青いという。そんな郁子にはさすの雲龍もかなわぬかもしれないと思ったりする。

きつね雨朱きらきらと烏瓜 近藤きくえ
雨に濡れた烏瓜の赤が鮮やかに浮び上がる。きつね雨の降ったり晴れたりする日和がなんとなく不思議な雰囲気をもたしている。

何も彼も秋の入り日に越されけり 大山 里
秋の入り日は釣瓶落し。そんなふうにも何も彼も先を越されたのに、悲壯感を伴わないのは作者の手柄か。

かにかくにの碑に秋蝶の来てをりぬ 近藤 紀子
碑に蝶が来ていても、なにほどのことはない。かにかくにの碑であるところに、しかも秋蝶であるところにこの句のよろしさがある。へかにかくに祇園はいし寝るときも枕の下を水のながるる 吉井勇の歌に秋蝶を見るのである。(以下略)